

バッタ会のこと

バッタ会に参加するのに抵抗はなかった。なぜなら、わたしは既に、セミ会に参加していたからだ。セミ会は夏で、暑かった。半袖半パンで行ったら、経験者に笑われた。わたしも旦那も、そこらじゅうを虫に食われてしまった。虫を食うために参加した会なのに、皮肉なことだ。

その点、バッタ会は秋のもので、安心だ。わたしたちは気候と環境に適した長袖長ズボンで集合場所へ向かった。待ち合わせより一時間半も早く到着した。日頃来ることのない二十三区外、日野市。日頃持つことのない、虫捕り網。わたしも旦那もソワソワと張り切っていたのだ。

空腹で網は振れまいと朝ごはんの駅そばを食べ、コンビニでおにぎりを買う。

「持ち物一覧に軽食って入ってたもんな」

「バッタではお腹膨れへんってことなんかなあ」

「おれ、バッタに合いそうな味にしょ。……まあ、銀シャリかな？」

それでも時間があつたので、高幡不動でお詣りをした。バッタ会での安全と大量を願い、土方歳三の像の前でスマホを確認すればちょうど良い時間になっていたので、集合場所の改札前へと戻った。

虫会の参加者たちはすぐに分かる。網を持っているからだ。それに、先生もいる。先生には、セミ会のとくと、昆虫食のイベントのとくと顔を合わせている。もともとは、著書やテレビで一方的に知っていた。

「おはようございます。今日はよろしくお願いします」

「おはようございます。良く来てくれましたね」

わたしたちのように夫婦で参加している人間だけでなく、女の子同士ふたり並んでいる人や、ひとりで来ているおじさんや、若い男の人、女の人、年齢不詳な人、それから、夫婦らしき二人が小さな子どもを連れている、そうしたファミリーなんかがいる。みなが虫捕り網を持ち、わたしたちのようにソワソワとしていたり、網の先っぽで床をなぞっていたりする。

「あ、あのひと」

わたしが旦那に耳打ちするより、その人がこちらを見る方が早かった。大柄な彼はニッコリ笑ってこちらに近づいてきた。

「やあ、最近はどうですか。何か捕まりましたか」

その人とは、セミ会のように顔を合わせていたのだ。「セミ会以来ではありません。そちらはいろいろ捕らえたのでしょうね」「ふふ、まあいろいろね」少し会話をして彼が別の人へ挨拶をしに離れたあと、旦那に顔を寄せて「最近は何か捕まりましたか、やって」「捕った前提やもんな」「捕った、なんか、採った、なんかやな」「口頭じゃわからんわ。あの人、猟師の資格取ったらしいで」「すごい、なんでもとっちゃうな」と、ふふと笑い合った。猟師さんは、今度は背の高い大学生と話している。なぜ大学生だと分かるのかと言えば、そちらもセミ会で見た顔だからだ。彼のTシャツが何だか気になると思ってプリントを良く見てみれば、なんと、ダンゴムシ柄（！）だった。

「あの」女の人が話しかけてきた。「先月の昆虫食イベントでお話ししましたよね」

「！ あーっ」彼女とは先月タガメを解体した仲だ。強烈なフルーティさが鼻に蘇る。

「今回は採る方ですね」

「よろしく願いますね」

そつと心の中でタガメさんと呼ぶことにする。タガメさんは笑顔で頭を下げ、元の位置へ帰って行った。昆虫食で知った顔が増えていつている、と面白くなって、ひとりでもたふふと笑った。そうこうしているうちに参加者が集まったようで、先生が号令をかけた。

「それでは、現地に向かいましょう」

先生は著者近影で見るよりアウトドアな服装をしていて、オシャレな秋らしい帽子もかぶっていた。

みなでぞろぞろと歩いて、川を目指す。多摩川沿いで捕るのかと思っていたが、そこから分かれた浅川という川らしい。だけど、多摩川もすぐそばだそう。わたしは多摩川といえ、アザラシのタマちゃんぐらいしか知らない。

信号待ちのときに、会費と引き換えでもらった紙を開いて見てみる。

イナゴ、クビキリギス、オンブバッタ、ショウリヨウバッタ、エンマコオロギ、ツユムシ、トノサマバッタ、と画像付きで紹介されている。

「おれ、やっぱトノサマバッタが食べたいわ。絶対採るで」

旦那が言う。わたしはオンブバッタが見たいけれど、オンブしていない状態だと、それが何だか分からないのかもしれないと考える。

バッタたちの画像の上にはこの一文が書かれている。

〈美味しいバッタを採って食べて秋の一日を楽しみましょう!〉

それほど歩かないうちに土手に出た。ランナーたちとすれ違いながら土手を進み、先生がその辺りから行きましようと言うところで河川敷に向かって坂をくだる。大人になってから河川敷へくだるときが来ると、いつもドキドキとする。いや、子どものときもそうだったかもしれない。足の裏に力を込めて、滑り落ちないようにしながら慎重に歩いていく。

河川敷におりると、途端に草の背の高さを感じる。右手の土手も見上げる高さだ。いよいよやってきた、という感じがする。地面はどことなく湿り気を帯びているように見えるが、べったり濡れるほどではない。

「それにしても、雨にならなくて良かったですね」

先生に言えば、大きく頷いて

「ほんとうに。ぎりぎりまで天気予報がどうなるか分かりませんでしたからね」
と返してくれた。

前を歩く旦那が振り返って、「これ、つけとき」と軍手を手渡してくれた。彼が発前に慌ててコンビニで買っていたものだ。「クビキリギスは、噛むらしい」

「え？ 噛むん？」

「はい、噛みますよ。牙のある肉食・雑食は噛みます」先生も頷く。

わたしは軍手をつけながら、出会いたくない虫ランキング上位にクビキリギスを配置させる。

草の向こうから男の人が出てきた。パーマの長髪で、虫捕り網を持っている。その姿を見て、あ、と小さく呟く。この人も昆虫食イベントのときに見た。確か、運営側の人だ。いちおう食べ物を食べるイベントなのに、でかかた便器がプリントされたTシャツを着ていて驚かされたので、印象に残っている。禍々しい雰囲気便器からナイフを握った手が突き出されているイラストだった。今日も禍々しいタッチの服を着ている。メタル系というか、そういう感じなのだろう。

「まあ、こんな感じですね」

メタルさんが洗濯ネットの中の虫を先生に見せている。

「一気に冷えたから、少しね。大きいのが見つければ良いんだけど」

先生は虫をじっと見ながら答える。わたしは昨晩届いたメールを思い出す。見たことのない名前の女の子からのメールで一瞬何かと思ったが、〈バッタ会参加の皆さんへ〉という件

名を見て、ああ、と思った。

〈バッタ会参加の皆さんへ

雨が心配されましたが、今日の天気良かったことと、明日も日中は曇りという予報です。予定どおり明日バッタ会を実施することになりました。

このところ雨が多く気温も一気に下がったので、収量はあまり期待できませんが、ストックしてある昆虫をできるだけご用意いたします。

雨具はお持ちいただいたほうが安心です。それとイベント会場は河原で地面はやはりいくらかぬかるんでいますし、草丈も伸びていますので、多少ぬれてもいい服装でおいでください。

では明日は秋の一日「美味しい食べ物」を狩っておおいに楽しみましょう。京王線高幡不動駅で11時にお待ちしています。

バッタ会実行委員会〉

調理&食事会場は橋の下に用意されており、そこにはシートが何枚も並べられていた。辿り着いた参加者たちは、そこにカバンを置く。

それで、採取会場はこの周辺一帯、ということだ。

「ただし、川の中には入らないでくださいね。最近の雨で水が増えていますので、危険です。どれだけ美味しそうな魚が呼んでいようと、今日はバッタ会ということで、そちらは我慢してください。代わりに、虫は何でも捕ってきてください。ここらにいるものはおおよそは食べられますし、ほんとうに食べてはいけないものは、ここで我々が判断します。それでは、ええと、十三時頃にまたここへ戻って来てください」

そうして、バッタ会はスタートした。すぐに猟師さんが草を掻き分けて奥へ奥へ進んでいった。その勢いに一瞬驚かされたが、わたしも右手には虫捕り網、左手には配布されたジックブロック。準備は出来ている。なので、草の方へと進む。

河川敷には細い道が出来ていて、その両側はもう草だ。踏み分けていけそうな高さの場所もあるし、猟師さんのように掻き分けないと進めないような高さもある。それにしても、バツタ採りなんてマトモにやったことがないのだから、やり方が良く分からない。旦那に話しかけようとしたが、もう随分先の方へ進んでいる。真剣な顔で足元を見つめながら歩いているのがここから見える。

まあ良い、わたしも気持ちはハンターだ。右手にも左手にも心にも準備は出来ている。セミだってたくさん採ったのだ。低い草むらに入っていく、じっと見つめる。歩く。見つめる。見つめる。

！ 何かが動いた！

網を振り、そのあたりを刺激する。やはり何かが動いた！ 網を振るかぶせる。網は草の上にはふりとなる。網の上からガサガサと探せば、見つかった。バッタ系の形をした、虫だ。軍手では上手く掴めないのが煩わしく、足で網を抑えながら結局軍手を取って、指先でつまんだ虫をジップロックに投げ入れた。

「採れたーっ！」

「おめでとうございます」

近くにいた女の人が言ってくれた。一緒にいる娘さんらしい少女が近づいてきて、ジップロックの中身をじいっと見つめた。

「何の虫？」

「なんだろう？」

先ほど貰った紙をポケットから取り出して広げて見るが、良く分からない。それに、随分小さい。まあ、ともかくバッタ系には見える。

これがわたしの今回の第一収穫だ。腹にはまだまだ足りない。網を構えなおす。

「ギャーッ」

次のバッタを探しているときに、悲鳴が上がった。さっきのお母さんだ。娘さんがそばで慌てている。走って近づく。

「だ、だいじょうぶですか」

「あの、虫が、イタイイタイ。あー、どうしよう」

まさか、クビキリギス！ 慌ててお母さんの指先を見るが、血は出ていないのでホッとす
る。

「なんというか、たぶん噛まれてはないと思うんですけど、なんか刺さってて。大きいからかな。イタイイタイ」

「わ！ ほんとうだ！ すっごい大きいですね」

「ほんと、ぜんぜん取れないの」そう言いながらお母さんは苦笑しているので、わたしはさらにホッとす。だけど、痛いのは事実だろう。

わたしと娘さんとで虫をあれこれ引っ張って、なんとかお母さんの指から離れた。虫の足

をちぎらずに済んだ。お母さんは「あー、痛かった。軍手つけないとね」と笑った。虫を投げ入れた先を見て、わたしはぎよっとする。そのネットに入っている虫はすべてかなり大きなものだった。五匹か六匹かがネットをのぼったりして、中で歩いている。

「こ、これ、すごいですね。みんなおおきい。すごい。さっき始まったばかりなのに」

「え？ ああ、違うんです。これね、すごい虫採りお兄さんがいて。その人が渡してくれたんですよ」

「あ」

わたしはメタルさんを思い浮かべる。確かに彼は開始前に既に虫を採って、ネットに入っていた。

「なんかね、お兄さんが言うには、こいつらの鳴き声を聞かせれば虫が寄ってくるから、持って歩けば良いですよって」

「そういうもんなんですかね」それがピンチの声であれば、みんな逃げ出しそうな。

「でも実際に大物来ちゃいましたね。さっきの思い出したら、嬉しいのやら困ったやら」言葉ではそう言いながらも、お母さんの目はじっと先ほど採った大物を捉えている。この人だってバツタ会の参加者なのだ。バツタが採れて、嬉しくない訳がない。

わたしもネットの中を見つめる。自分もこの手で大物を採らえてやろう、と気合が入った。

そんな調子で草むらを見ていて、三匹捕まえたが、どれも小さい。みなが進んでいったようにもつと奥に行った方が大物がいるのだろうかと思いつつ、それでも一応虫が見つかったはこの狩場を手放せない気持ちもある。

参加者たちはどんどん突き進んでいった。周辺にはさっきの母娘しかない。

と、思ったが、左方向の草の中に男の人が屈んでいる。随分大きく本格的な網を持っているので、集合場所から印象に残っていた人だ。彼は地面を掘っているように見える。

「土の中に虫がいるんですか？」

「え？ ああ、いえ、ノビルですよ」

顔を上げた彼はニツコリと笑って、草の束をこちらへ見せた。ネギのような細長い植物で、白い根っこまで綺麗に取り出している。

スマホのアラーム音が鳴って、ノビルさんがポケットからそれを取り出した。

「十二時だ。よし、ここからはバツタを採るぞ」

ノビルを持って立ち上がり、歩き始めたノビルさんの背中を見ていて、ああ、あれも食用

なんだ、とわたしは気が付いた。

それから、網を構え直す。大物を求めて狩場を移動することを決めた。

確かみなはこちらの方へ進んでいたと思うのだが、それからまたどこかへ行ったのか、どれだけ歩いていても人の姿が見えない。そうして歩きつつも、視線は基本的には下の方へやっている。わたしは人の気配も虫の気配も求めている。

セミ会ときには会場はそれほど広くなくて、視界が開けていた。公園の中の、ぜんぶで三十本くらいの木をうろうろと何周も見回って探したのだ。だから旦那とはすぐに出会えたし、定期的にネットの捕獲物を見せ合った。ふたり並んで忍び歩きをして、獲物が見つかったら譲ったり取り合ったり、忍び歩きで解散してまた別の場所を目指すこともあった。

そうだ、セミ会の上ばかりみていた。バッタ会では下ばかり見ている。だから何だということはないのだが、ただ単に今、そう気が付いた。そして気がつけば、わたしは不安になっていた。

旦那の名前を呼んでみる。もう一度、次は少し大きめに。草は背丈が高く、先まで見渡せない。川の流れる音がする。右手の土手は高く、自転車がスピードを持って通り過ぎていく。やがて、川へ出た。これまでも川沿いを歩いていたのだが、歩く土の道と川との間には背の高い草のエリアがあった。ここは高い草がなくなって、より、近くまで出てこられる場所だ。背の低い、コロポックルの棲んでいそうな草のすぐ先に川がある。どうどうと流れている。中州があつて、その先にもどうどうとした川があつて、それでは、あちらが多摩川？ いや、そんなことはないだろう。分からないけれど。右の方を見れば、すぐに川は繋がっている、どうどうと流れている。

中州は土が露出している部分が多いが、ところどころ草も生えている。西部劇で風に吹かれて転がっているような茶色いぼわぼわした草の塊が中州を縁取るように生えている。川の向こう側にはいかにも川沿いという雰囲気草に、それから、木がこんもりだ。そのときにわたしは、知らない草ばかりだ、と思った。年を取って大人になって、花の名前はそれなりに覚えた。なのに草は、草としか認識できないものばかり。ノビル、だなんてわたしはそれがそうだと判断して根っこから抜くことができないし、今自分を取り囲むものは分からないものばかり。

悔しくなったのか、圧倒されたのか、己を知ったのか、感情が良く分からないままにじつと足元の草を見つめていれば

「あ」

その姿を見つけると共に、屈んで手をかぶせた。つまんで、持ち上げる。

つやりと光りそうな目が見えて、瞬間、身体の奥が熱くなる。

これまでで一番大きい虫だ。慌ててジップロックに入れ、その透明越しに姿を確認する。

薄茶色とこげ茶色の縞のような木目のような模様をしていて、ぴんと伸びた二本の触覚、仮面ライダーのような顔、そして何より、立派な後肢をしている。

わたしはしばらく、その姿を見つめる。心臓がしばらくの間、鼓動を強めていた。

元の道を引き返しながらも、心持ちはこれまでとは違う。より真剣に足下の草を見つめたとし、気配に敏感になったように思える。良さそうだと思う草があれば、掻き分けて入った。そうして、バツタを捕まえた。紙を取り出して、その姿が画像と一致した。子どもの頃に黄色の折り紙で作ったものを思い出すフォルム。全体的に細長い。これは、シヨウリヨウバツタだ。先ほどの大物は分からなかったが、こちらはすぐに分かった。満足感と共に紙をポケットに仕舞う。

ずんずん、草の中へ進むとき、手も足も草を分ける。足は普段より高く上げる。だから、ずんずんと言う音の似合うステップになる。

虫を採るのに頭を低く下げていて、上げたときに目の前にクモの巣があつて驚いた。その家主もいる。黄色と黒で綺麗に横縞の入った、嘘みtainなホンモノのクモだった。

（クモも確か食べられるはずだけど）

わたしは先生の著書の中のクモの項目を思い浮かべる。秋はジヨロウグモが赤く色づく季節。その味は枝豆そっくり。巷ではクモはチヨコレートの味だとよく言われるが、先生はそうは思わず、コガネグモは薄い青汁、アシダカグモはカニ風味……。

「調子はどうですか」

突然の声に驚いて振り返れば、メタルさんがいた。

「あ、えと、こんな感じですね」

慌てながらも、ジップロックを突き出すときには誇らしさがあつた。メタルさんはじっとそれを見つめた。

「ああ、立派なクルマバツタモドキ。大きいですね」

メタルさんは目尻を下げて笑う。わたしが分からなかった名前を、彼はあっさりと口にした。クルマバツタモドキ。それを頭の中で唱える。

思い出して振り返ったときには、クモはいなくなっていた。獲物から目を離したのだから、それはそうだ。

虫を採りつつ道を戻って行って、シートの場所まで帰って来た。まだみな採取に出ているのだろう。カバンばかりがそこに座っている。五人か六人か、それくらいの人にはシートの端にいて、鍋を並べたり、バーナーやカセットコンロを取り出したりして、料理の準備を始めているようだった。

よし、まだだ、まだ採ろう。

「あーっ、採れましたーっ！」

近くで女性の大きな声が上がったので、そちらへ向かう。

「おめでとうございます」

「ありがとうございますっ。ホラ、トンボですよ」

「トンボ！」

「これだけいっぱい飛んでるから、網振り回したら採れるんじゃないかと思って」

「すごい！」

トンボさんはニカット笑ったあと、わたしに手を伸ばしてきた。

「ちょっと私入れ物がないので、そちらに失礼しますね」

これでわたしのジップロックには、クルマバッタモドキとトンボとシヨウリヨウバッタと、その他いくらかのバッタ系たちが共存することになる。

「トンボですかあ！ 良いですね」

聞き覚えのある声だと思えば、先月わたしにタガメの解体方法を指導してくれた男性だった。まずはあ、ハサミを使って、タガメのお尻を切っちゃってください。だいじょうぶですよ、そのあたりからやっちゃってください。すぐフルーティな匂いがしますね。それはタガメの、フェロモンですよ。大きな声でニコニコと話すのが印象的だった。だとすれば、集合場所で挨拶をした女性ではなく、この人こそがタガメさんか、とひっそり思う。

「ほら、これです」

わたしがジップロックを向ければ、タガメさんは丸い目を大きくしてそれを覗く。

「ああ！ 立派なトンボです。それに、クルマバッタモドキもいますね」

「クルマバッタモドキはモドキなんですネ」

「はい、でもちゃんとバッタなんですよ。クルマバッタもクルマバッタモドキもバッタで

す」

アハアハ！ とタガメさんは楽しそうに笑う。

つられたように口を開けて笑うトンボさんの後方に

「あ」

旦那がいた。朝家で選んで、一緒に電車を乗り継いできたときに着ていた、ブルーのお気に入りのアウターを着ている。

こちらにやってきた彼は、誇らしげにジップロックを掲げる。

「ああ！ 立派なイナゴたち！ それに、シヨウリョウバッタもオンブバッタもいますね！ なかなか大量ですねえ！」

タガメさんは丸い目で捉えたものの名を、大きな声で放ち、そして楽しそうに笑う。

「オンブバッタ！」

急いでポケットから紙を取り出し、画像と照らし合わせて確認をする。ジップロックの中のオンブバッタは滑らかな黄緑色をして、白い腹を我々へ見せている。尻の方は赤い。こちらもなかなか、立派な後肢をしている。背中側をそっと覗けば、その名前らしい姿が確認できた。

「バッタが美味しいのは、その飛翔力と跳躍力ゆえです。つまり、胸と腿の筋肉が発達しているからです。仮面ライダーもジャンプが強力ですよ。仮面ライダーのモチーフはご存知、トノサマバッタです。バッタを食べるときは、しっかり噛み締めてみてください。後肢の旨味が口中に広がるはずです。しつかり噛み締めるのはもうひとつ理由があって、そうしないと、肢のトゲが喉に引っかかって大変な思いをします。しかし、それがあったとしても、バッタの美味しさを思えば、迷わず口にしたいくなるものですね」

セミ会調理中の昆虫食トークセッションで、先生がそんな話をしていた。それを聞いたときにはもう、秋のバッタ会について思いを膨らませていた。

「さっきなあ、カマキリを見てん。かなり大きかったで。この辺やってんけど」

旦那はそう言いながら、シート裏エリアの草深くを掻き分けて進む。

「トノサマバッタは？」

「まだ見つけてへん。トノサマバッタも欲しいけど、いまはさっきのでかカマキリが気になる。どこやろう？」

「どこやろなあ」

ふたりで草を掻き分けていれば、その奥からガサリと獵師さんが現れ、ニカリと笑った。

「こんにちは！ お二人、調子はどうですか」

「まあまあ、こんな具合ですよ」

ふたりとも誇らしげにジップロックを掲げる。獵師さんはじっと覗き込み、口角を上げる。

「良いですねえ、良いですねえ。今日は場所のコンディションは良くないですが、それでも僕もまあまあな感じで採れました」

獵師さんが掲げたネットの中には、大物ばかりズラリと並んでいる。

「さすがですね！」

「ふふ、それでは僕はもう少しあっちで採ってきます」

「はい、あ、なんか刺さってますよ」

「もう行っちゃった」獵師さんの背中を見送る旦那がつぶやく。

「な、Tシャツの胸元にとげとげのなんか刺さってたな」

「くつつき虫やろなあ。そう言えば、さつきトンボ採ってた女の人も、ズボンくつつき虫だらけやったな。ホラ、三角タイプのやつ」

「あは、くつつき虫って！」わたしは、自分の穿いているつるつるしたズボンを撫でる。

わたしたちは素材でセーフ。意図した訳ではなく、偶然だが。

「あ、それよりカマキリや、カマキリ」

目線を草にやる。今日という日ですっかり草の中に対するセンサーが研ぎ澄まされたような気がする。

「そこ！」

網をかぶせる。だが、草が高いので、網は下まで覆うことができない。ガサガサと動かし、中のカマキリを探す。

「逃げられたかなあ」

「草が高いもんな。手え突っ込んだ方が早そうやわ」

「でも、カマキリにも噛まれそうやない？」

「まあ、バッタもカマキリも食われるために捕まえられたら、そら噛むやろ」

「そらそうか」

どこかでアラーム音が鳴る。近くにノビルさんがいるのだろう。十三時になった。

「あー、結局カマキリもトノサマバッタも見つからなかったなあ」

「それな。悔しいけど、でも、だからこそ、また参加しようって気になるかも」旦那は草の方を見つめながら、そう言う。

「確かに。でも次に捕まえられたら、その達成感が癖になってまた参加したくなるんやで」

「そうかもな」

顔を合わせ、笑う。

捕まえられて、その肢を噛み締めることが出来たなら。その旨味が癖になって、また参加したくなるのだ。

ポケットから紙を取り出して、トノサマバッタの画像を見つめる。別格な大きさ。頭も胴体もゴツイ。もちろん、後肢は大変立派で、どの部分を見てもその名前にふさわしい姿をしている。

「ところでどういう調理をするんだろう？」

呟けば、近くに立っていた先生が、わたしの紙をくると裏返した。

そこにメニューが書いてあった。

● バッタ類の素揚げと唐揚げ

【材料】 バッタ類 主に小型…素揚げ、主に大型…唐揚げ

唐揚げ粉1袋、揚げ油適量、塩・コショウ、水、キッチンペーパー

【作り方】

〔素揚げ〕

- 一 180度くらいの油でからっと揚げ、キッチンペーパーにとり、油を切り、塩・コショウをふる。

〔唐揚げ〕

- 一 唐揚げ粉を水でやや濃い目に溶く。
- 二 素揚げしたバッタ全体に唐揚げ粉をつける。
- 三 180度くらいの油でからっと揚げ、キッチンペーパーにとり、油を切り、塩・コショウをふる。

● マゴットとタケムシのカナッペ

【材料】 マゴット（イエバエ幼虫）適量、タケムシ適量

イチゴジャム適量、クラッカー60枚

【作り方】

- 一 マゴットとタケムシをフライパンで軽く炒る。
- 二 クラッカーにイチゴジャムを塗り、マゴットとタケムシをトッピングする。

「タケムシ、バンブーワームだ」旦那が興奮した声を上げる。

「カナッペってなに？」わたしは首を傾げる。

●アリの子とカイコさなぎのコンスープ

【材料】アリの子2缶、カイコさなぎ適量、コーン（クリーム）缶、

牛乳、コンソメ、水、塩・コショウ

【作り方】

- 一 コーン（クリーム）に牛乳、コンソメを加えて加熱する。
- 二 カイコさなぎとアリの子を入れて煮る。
- 三 煮立ったら、塩・コショウで味をととのえる。

十三時になる前に準備をしていた人々が、もう小鍋のスープをかき混ぜている。先生たちが持ってきたストックの昆虫たちに、既に唐揚げ粉がつけられ、揚げられている。わたしたちが採ったものは、これからだ。

「何か手伝えることはありますか？」

「そうしたら、カナッペのジャムを塗ってってください」

「カナッペ」

イチゴジャムの瓶を受け取り、シートの前で屈む。先生が紙皿に並べていくクラッカーに、スプーンですくい取ったジャムを塗りつけていく。隣ではズボンをくつき虫だらけにしたトンボさんが、バーナーにセットした鍋の中の虫を菜箸で炒っている。

バチバチバチ！ と大きな音がする。バツタが次々と油の中に放り込まれている。放り込むのは全身黄色いコーデの黄色さん、菜箸でそれを取り上げるのは昨日メールを送ってくれたメールさんだ。彼らよりもわたしの方が、油跳ねに驚いてしまう。だって入れるたびに大きな音がするのだ。

〈そら囁むやろ〉

さっきの旦那の言葉を思い出す。そして、「そら大きな音くらい立てるやろ」とひとり呟

いてみる。とても香ばしい匂いがしてきた。

「バツタを揚げると、すごく香ばしい匂いがしますね」

「ええ、食べたときも口いっぱいに香ばしさが広がりますよ。それと、揚げたときに彼らは色が赤くなるんです。海老と同じですね。アスタキサンチンという色素がそうさせるのです」

「へえ」確認してみたいが、跳ねる油がおそろしく、顔を近づけることができない。

気がつけば、旦那が鍋の近くでスマホを向け、動画を撮っている。あとで見せてもらおう、と思ったときに「あちっ」と旦那が叫んだ。それでもスマホは落とさなかった。

「イチゴジャムを塗りおえました」

「そうしたら、次はこれですね」

先生が掲げてこちらに渡したのは、深い紙皿にたっぷり入った白い虫たちだ。カブトムシ幼虫に似ているようにも見えるが、もう少しスリムだ。白いのがところどころ茶色くなっているのは調理をしたからだと思い、さっきトンボさんが炒っていた虫だと気がつく。

「これがバンブーワーム、タケムシですね。これを良い感じにイチゴジャムの上に振りかけて、30枚分カナッペを作ってください」

「カナッペ！」

そのときにわたしはぴんと来た。カナッペとはあれだ。パーティーで良く出てくる、あれだ。

「せっかく炒りたてなので、まずはそのまま。つまんでみてください」

じゃあ、少し失礼して。

！！！！これは、

急いで旦那のところへ向かい、肩を叩く。

「これは絶対好きな味だから、食べて」

「え、バンブーワームやん。食べてみたかってんて。動画で観てな」

三匹ほどつまんで口に放り入れた彼も、！！！！の顔をする。

「これは、」

「これはつまみですな」

「チーズ系のやつですな」

「味が濃いですな」

「ビールですな」

興味を惹かれたらしい近くの人々にもつまんでもらい、それからカナッペ製作所へ戻る。

あまりその場を離れていると、カナッペ前にバンブーワームがなくなってしまう。

全体量を見ながらバンブーワームを振りかけている間も、バチバチバチ！ とバツタたちが大きな音と香ばしい匂いをさせている。

バンブーワームとマゴツトのカナッペが30ずつ出来上がった。残ったバンブーワームをふたたび一つまみ、口に入れる。わたしはカナッペをみなに配る役割を担ったので、紙皿を持って回った。

「あ、どうも」メタルさんが受け取る。

「わ、これはすごい」おじさんが受け取る。

「バンブーワームですね！」タガメさんが受け取る。

「いただきます」ダンゴムシさんがサクリと齧る。

「わわ、写真撮って良いですか」女の子がスマホを構える。

「あゝ、これ美味しいよねえ」お母さんが口に放り込む。

皿の中をじっと見つめた幼い男の子が「いいです」とふるふる首を振った。そのお母さんが笑った。

みな好きに色んな場所に散って話をしているので、あとのカナッペは製作所に置き「みなさん、ここにあるのでどうぞ」と言っておいた。言う前から取っている人もいた。人が何人かやってきて、紙皿に並ぶ様子を写真に撮ったり、指でつまんで口に入れたりした。

わたしもバンブーワームカナッペをつまみ、口に入れる。

チーズ風味とイチゴジャムとクラッカー、なるほどこれは、パーティーの味だ。

「バツタが揚がりましたよゝ、みなさんどうぞ揚げたてを食べてくださいね」

そうなればそちらの声の方へ、みなそろそろと向かう。

「ほうら、これがバツタ弁当です」

大きな声の方を見れば、派手な服を着ているカラフルさんが、持参してきたシュウマイ弁当の米部分の上に

ででん、

と大きなバツタを乗せている。

「ええーっ！ すごー！」

思わず、写真を撮って良いかと尋ねた。快諾したカラフルさんは誇らしそうにしている。スマホの画面に入ると、米の上の揚げバツタは、尚更インパクトが強く見えた。

自分の分の紙皿に素揚げバッタと唐揚げバッタが合計三匹。旦那の皿と近づけて、ふたりとも写真を撮る。

スマホを離してから、少し見つめる。どれかがわたしの採ったものだろうか。クルマバツタモドキはここにいないように見える。他もどうか分からない。しかしともかく、どれも先ほどまでこの河川敷にいたものたちだ。

心の中で、いただきますを唱える。

それから、口にもしてみる。

「それでは、いただきますーす」

すでにカナッペは食べていたが、そう言った。近くでも同じセリフがやまびこのように響く。

箸で口に運び、サクサクサクッ。

揚がるときに漂った香ばしさ、それがそのまま口の中いっぱい広がる。サク、サクサク。

「うん、んん」

旦那の方を見ながら頷けば、

「うん、うん」

旦那も同じようにこちらを見て頷く。

ふたりともサクサクと噛みながら頷き合う。普段よりしつかりと噛む。トゲを喉に引っ掛けることなく噛み砕いてしまいたいし、そして何より、この旨味を味わいたいのだ。

ふと思いついて、スマホのメモ機能を開く。虫たちの味わいを書き記しておこうと考えたのだ。

「かいこはプチッとしていて、中からとろりと身が出る。おいしい。味が濃い。ときどき強烈。」

かいこはありの子と共にスープになっていた。知っている味なのに、知らないもののようなコーンスープ。

バンブーワームはタケムシ。つまみの味がする。おいしい。チーズ風味。

バッタは香ばしい。揚げているときのおいがたいへん香ばしい。でかいとちよつと食べづらい。小さい方が食べやすい。だけど、トノサマバッタに関してはやはり食べてみたい。

タケオオツクツク（セミ）は外来種。白い。おいしい。

ハチはほぼセミ。

ヨモギとセイタカアワダチソウのスープはやばい。キマる匂いがする。苦い。でも美味しい。何かしら治る味がする。とても苦い。自然の澄んだ苦味だ。

イチゴジャムは美味しい。

ウジムシはふりかけみたいなもの。カナツペに乗っていた。くずしたおにぎりにもふりかけて食べた。

タケムシもカナツペに乗っていた。〽

みな虫を食べながら、それぞれ好きに会話をしていた。ときどき移動して何かをつまんだり、そこにいる人と会話を始めたり、子どもは走り回ったりしていた。

ヨモギとセイタカアワダチソウのスープはタガメさんが作ったのだ。それをついでもらった湯気だつ紙コップを受け取って、匂いを確かめようと顔に近づけたわたしは「っあぁー！」と声を上げた。

「え。なにこれ。やば。知らんけどすごい匂いがする。なにこれ。薬用？ とにかく、身体には良さそうではあって、だからこそつて感じのすさまじい匂いがする」

猫舌のわたしはしばらくそうして匂いばかり味わっていた。ちっとも飽きないほど強烈な匂いだった。冷まそうと息を吹きかける度に匂いが上がってくる。口にした旦那は「わ。あ。これ、すごい。おお。うわ」と眉を寄せながらも、何度も口に運ぶ。

そろそろ良い温度だろう、それに匂いばかり嗅いでいるうちに身体がその味を求めてしまっている、とようやく口をつけて注ぎ入れたわたしは、

「あああーっ！」

と叫ぶ。メールさんがこちらを見て、ふふふと笑う。

とんでもなく強烈で身体が驚くのに、何度も求めてしまう。

スープに浮いている黄色い花をじっと見つめて、それも口にする。声を出したくなる苦みと癖になる美味しさ。

「だけどおれ、やっぱカイクのスープも良かったなあ。プチッてした感触、また欲しい」

「あ、まだありますよ。おかわりしますか？」メールさんが聞く。

「ほしいです」

「わたしも」

それでスープを入れてもらったので、わたしは両手に紙コップを持つことになってしまった。

カイクを歯でプチツとさせて、中身の濃厚さを味わう。

「カイコ、美味しいなあ」

呟くと、先生がくりとこちらを向いた。

「ね、カイコって美味しいですよ」

そういうとき、先生はほんとうに嬉しそうに話すのだ。

元タガメさんになった女の人はエビパンをちぎっている。なので、エビパンさんと心での呼び方を改めることにする。

「エビパンですね」

「ええ、量が調整できるようにと思って、ちぎれるものを。だけと思った以上に虫料理の量が多くて、エビパン要らないくらいだったかもしれません」

「確かに」

「なあ。これまでで一番いっぱい虫食べたわ。いろんな種類のな。バッタがあんま採れへん状況でかえって得したかもしれん」

「でもやっぱりバッタもいっぱい採ってみたかったよな」

「そらそうや」

「また参加しようってことやな」

エビパンさんはニコニコ笑っている。

「またお会いできそうですね」

「そうですね」

終了予定時間がやってきて、集合写真を撮った。メールさんがカメラマンをしてから、メタルさんと入れ替わって、そちらのバージョンでも撮る。

先生が挨拶をする。

「今日はみなさん、ご参加ありがとうございました。天気にも恵まれて、ほんとうに良かったです。きつと、みなさんの日ごろの行いが良いおかげですね。バッタやその他の虫をたくさん味わうことができましたでしょうか。我々はこうしたイベントを定期的に開いておりますので、ご興味ありましたら是非ご参加ください。またお会いできるのを楽しみにしております。それでは、お氣をつけてお帰りください。駅はあちらの方向です」

そうして先生が指差す土手上の方向に、今はまだ現実感がない。
パチパチパチと拍手が起きた。

先生にお礼と挨拶をして、数人に手を振って、シートに背を向ける。きつと次会ったときも、わたしは彼らに名前が聞かないのだろう。それでも思い出が増えていく。

「たのしかったなあ！」

「なあ！」

旦那と言いながら土の道を歩き、足裏に力を込めながら、慎重に坂をあがる。

土手にあがると、一気に視界が高くなる。振り返ってシートの方を見ると、そこにいる人々が遠く、夢の世界のように感じられた。

だけど、鼻はバッタの香ばしさを覚えている。

齒はカイコの感触を覚えている。

「なんかさ、いつもにないパワー出そうな感じやわあ」

「わかる、おれも走り出したい気分」

「走っちゃう？」

なんて言いながら、走りはせずに笑う。土の上だったら、走っていたかもしれない。

右手を見ると、川がどうどうと流れている。秋の氣候が心地よい。バッタ採集のときにじわり汗をかいた身体を風がやさしく撫でていく。

「やっぱわたしは走っちゃおっかな」

「え」

心が逸るのだ。右手には虫捕り網、鼻の奥にはバッタ、齒の記憶にカイコ。

「あ」

川から顔を上げ、左方向を見ると、黄色い花があった。ずらりと並んで咲いている。

その名が表すとおりに背が高く伸びていて、先に黄色い花がついているのだ。それは先ほど紙コップのスープに浮かんでいた花で。

「つまり、これはセイタカアワダチソウ」

わたしはその名前を口にする。

「せやな」

旦那が頷く。

セイタカアワダチソウたちは風にそよそよと揺れている。高く伸びる先端に広がる黄色さを見ると、澄んだ苦みが舌に蘇る。

(了)